
らき すた ZERO

冴島鋼牙（春雨・T・サラダ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた ZERO

【Nコード】

N6043J

【作者名】

冴島鋼牙（春雨・T・サラダ）

【あらすじ】

家族を一度に亡くした、高杉零が転校してきて。
ドタバタの大日常が始まる。

プロローグ：始まりの時。

「じゃあ、父さん母さん行ってきます。」

僕の名前は【高杉零^{たかすぎれい}】この春から陵桜学園に転校してきた2年生。

もともとは県外の私立の高校に入学してたけど、この前の家族旅行で、事故にあって

父も母も亡くなってしまった。

それを機会に実家に戻り、陵桜学園に転校してきたんだ。

正直、不安だけど、なんとかなるかな。

職員室の前まで来た僕は、職員室のドアを開けた。

「失礼します、今日からこちらに転校してきた、高杉です。」

「おー、待っていたで、うちがあんたの担任になる黒井やよろしゅうな」

「よろしくお願いします。」

「しかし、ドタバタしottaんやから、こんなすぐ転校してこやへんくても。」

確かに、親の葬式とかでドタバタして、まだ1カ月しかたってない。

けど、正直家にいるのがつらかったんだ。

「大丈夫ですよ、こうやって学校にいる方が何も考えなくてすみやすから。」

「まあ、そういう考えなら、ええけど、何か悩みあるならうちに言うんやで。」

「はいわかりました。」

「ほな、そろそろ行こうか、高杉、ついてくるんや。」

「はい!」

ここで、新しい生活が始まる、期待半分不安半分だけど、楽しんでいこうかな。

プロローグ：始まりの時。（後書き）

初めての長編を書きます。更新頻度は遅いと思いますが、長い目でご覧ください。

ここで主人公のプロフィールを
高杉零【たかすぎれい】

身長173cm 体重55kg

もとは離れた高校で寮生活していたが、
親との事故により、自宅に戻り転校してきた。

体格に似合わないほどの大食いで
特技はパソコン

誰とでも気さくに話すタイプだが
恋愛関係には究極の鈍感。

まだまだ設定はありますが、これは後々明かされるかと
それでは皆様 らき すた ZEROをお楽しみに。

1話 ファーストコンタクト

「ほんじゃー、うちが呼んだら入ってくるんやで。」

「はい、わかりました。」

ここは2-Eの教室の前、今日から僕が入るクラス。

「ホームルーム始めるでー。その前に今日は大事な発表があるんや。」

「

「先生が結婚するん・・・それはありえないか。」

「泉ーええ覚悟しとるなー、ありえないってなんや、ありえないって!」

「うわわわ、先生ぶたないで。」

ガツーン 何かいい音が、響いたながと思いつつ僕は待っていた。

「先生をバカにした罰や。それはともかく、今日からこのクラスに転校生が来るんや。」

「先生、女の子ですか?」

「白石、残念やな、男子や。それじゃー呼ぶからな。」

呼ばれたので僕は入って行った、男子のがっかりした顔が気になるが、僕は自己紹介をした。

「はじめまして、今日からお世話になる高杉零と言います。慣れないことが多いかと思いますが、よろしくお願いします。」

ひとしきり、挨拶したところで教室内は拍手の音で満ち溢れた。

「そんじゃ、高杉は泉の横があいとるで、そこに座りな。で、泉、高杉は教科書まだないから見せたりーな。」

「はい。」

手を挙げた子の横の席に移動しようと思ったが、手の先しか見えてないから場所が分かりにくい。

「高杉零と言います、よろしくお願いします。」

「泉こなただよ、よろしくね、机を横につけるねこっちの方が教科書見えやすいから。」

しかし、躊躇もなく机をつけてきたな。お言葉に甘えようかな。

そして、授業は進んで、休み時間になった。

そしたら、こなたさんの側に女の子が二人やってきた。

「委員長の高良みゆきです、よろしくお願いしますね。」

「高杉零です、わからないことが多いのでいろいろ教えてください。」

「私は、柊つかさです、こなちゃんの友達です、よろしくね。」

「よろしくです、柊さん。」

「で、零君は誰が好みなのかい？」

泉さんがニヤニヤしながら話しかけてきた。

「えっ好みって、そんなあったばかりなのに。」

「ほら泉さん、こまらしちゃってますよ。」

「もう、こなちゃん、いきなりすぎるよ。」

話がそれたから、僕は一安心した。

授業は進み、昼休みになった。

1話 ファーストコンタクト（後書き）

これで、メインキャラ三人登場。

だいぶ遅れましたが、執筆中に何度も謝って消しました（汗）

2話 新たな出会いと、レイの大技。

キンコーンカンコーン

午前中の授業も終わりお昼ご飯の時間になった

「さてと。」

教室から出ようとする僕

「あれ、レイくんどこいくの？」

こなたさんに呼び止められた。

「ちょっとご飯買ってくるよ。」

「ほいほい、行ってらっしゃい。」

「それじゃー行ってくるね。」

教室から出たときに僕は誰かとぶつかった。

「きゃっ。」

「あつ、すみません大丈夫でしたか？」

「あつ大丈夫よ、こっちも前を見てなかったから。」

「すみません、こっちも気をつけますね。」

そう言っ僕は、購買に行った。

「えっこのパンとあとプリンを6個ください。」

パンを啜えながら僕は、教室まで戻ってきた。

「お帰り、レイ君。いっぱい買ってきたね。」

「まあ、僕たくさん食べますから。あっさっきの人すみませんぶつかっちゃって。」

「いいわよ、私も前見てなかったんだから、はじめまして私、つかさの姉のかみといいます。」

「今日転校してきた、高杉零といいます。よろしくお願いします。」

「おやーかがみん。フラグですか。」

「なっ何言ってるのよこなた。」

「あはは、ご飯の時間無くなるから早く食べましょう。」

僕もこなたさんたちの所に交じって、お昼を食べることにした。

「けど、レイ君。何、この大量のプリン？」

こなたさんが僕の持っているプリンに疑問を聞いてきた。

「あっこれですか。僕の好物と特技の為の道具ですよ。」

「特技って？」

「見てたらわかりますよ。みゆきさん、この腕時計のストップウォッチを、スタートで押してくれますか？」

プリンのふたを全部めくった後、僕はみゆきさんに時計を渡した。

「はい、いいですよ、では、スタート。」

僕はプリンを一個とると、次々と食べ始めた。

「ほえー。」

「何このスピード？」

「レイ君すごい。」

僕があっという間に食べ終わり、最後の入れ物を机の上に置いた。

「えっと、14秒です。」

「こんなものか、まあいつもと同じペースかな。」

「しかし、レイ君こんなに食べても、どうして太らないの？」

「あつ僕、胃下垂なんで、どんだけ食べても、60kgは超えないんですよ。」

「かがみん、うらやましい体質だね。（にやにや）」

「うつうつるさい。」

ガッン

「いたー！。」

僕はかがみさんとも仲良くなった。

2話 新たな出会いと、レイの大技。(後書き)

かがみも登場してメインメンバー勢ぞろいです。

ちなみにレイのプリンの早食いの特技は私の特技でもあります。
さらに胃下垂で、60kgが超えないというのも私の特異体質の一つです。

3話 きっかけは本で

♪ キーンコンカンコン

今日一日の授業が終わった。

「ふー、じゃあ帰ろうかな。」

荷物をまとめて、教室から出る。

「あれー、レイくんどこいくの？」

「あつちよつと本屋でも寄ろうかなって。」

こなたさんたちが駆け寄ってきた。

「レイ君は本よく読むの？」

「小さい頃から、本はよく読みますよ。この影響で視力はだいぶ悪いですけど。」

「そうなんだ、どんなジャンルが多いの？」

「ミステリーが好きですから、推理小説はよく読みますよ。」

「あとは好きな作家とかいるの？」

「うーん最近読んだ本で、気に入ってるのは。」

鞆の中から本を探す。

「これかな、そうじろうさんの『青空のかなた』かな。」

「えーーーーー」

突然驚くこなたさん。

「どうしたの？、こなたさん。」

「そつ、それ・・・私のお父さんの本。」

「まじっすか？」

「そういえば、こなちゃんのお父さん小説家だったね。」

「あたしたちは読んだことなかったけど、結構ヒット作はあるらしいからね。」

「えっと、そうじろうさんの子供がこなたさんで・・・どうしたらこの文章を書く人からこんな子供が。」

「レイ君さりげなくヒドイこと言ったね。」

あつこなたさんが、握りこぶしを握ってる。

「すみません言いすぎました。で、こなたさん。」

「なにーーーー」

「良かったら、そうじろうさんに会ってみたいんだけど。いいかな？」

「うーん、別にいいと思うけど、一発目で誤解招くかもしれないよ。」

「ん？じゃあ今度、お邪魔させてもらっていいかな？」

「OK！今度かがみんなたちが来るときに一緒に来なよ。その時に紹介するよ。」

こうして、今度、そうじろうさんと会うことになった。凄い楽しみだな。

3話 きっかけは本で（後書き）

どうも、お待たせしました、一か月ぶりの第3話投稿です。
ちなみに、ミステリー好きというのは私の趣味でもあります。
さて、次回は誰が出るのでしょうか？

出来ればおきにキャラのヴァを出せたらいいなと思ってます

4話 新たな出会いと何かの破片。

こなたさん別れた僕は家に向かって歩いていった。

「あやのー、今日はうちに来るのかー！。」

「どうしようかな、特に用も無いからね。」

前のほうをショートカットの女の子とロングヘアの女の子がいる
いてる。

「そんなこと言って兄貴と会いたいのは知ってるんだってヴァ。」

「もうみさちゃん、危ないよ、道路ではしゃいだら。」

ショートカットの子は元気そうにくるくる回ってる。

「大丈夫だよあやのー！。」

二人は横断歩道に差し掛かった、その時だ、信号無視の車が突っ込
んできた。

「危ないー！！」

僕は慌てて駆け寄った。

「キャー！ー！。みさちゃん。」

ガシッ僕は、ショートカットの子に体当たりをする感じで、車を避

けた。

「ヴァ、危なかったぜ。」

「みさちゃん大丈夫？あつ。」

「いててて、大丈夫だったか。」

「サンキュー、お前が助けてくれなかったら危なかったぜ。」

「良かった。」

僕はそう言っ立ち上がった、その時だ。

「グアー。」

自分の右腕が、外れてることに気づいた。

「ちょっと、腕が外れてるよ。見せてみて。」

「良いから、大丈夫自分で治せる。」

「あたし、陸上部だからこういう怪我慣れてるから、見せてみるよ。」

「いい、触らないでくれ。」

その時だ、あの記憶がよみがえった。

「うっうーーー。」

「本当に大丈夫？病院呼ぼうか？」

「いいから、大丈夫だから。」

「そんなことないだろ。苦しそうだぜ。」

「触るな!!」

僕はつい叫んでしまった。

「なんだよ、助けてくれたのは感謝するけど、そんな言い方ないだつてヴァ。」

「気にしないでくれ、それじゃー!。」

僕はそそくさと自分の家に戻った。

<みさお&あやの視点>

「なんだよ、あいつ、なああやの。ふえ何持ってるんだ？」

「これあの人の生徒手帳みたいね、隣のクラスの子だわ。」

「そっか、明日にでも返しに行くか。」

<レイ視点>

「ちくしょーー、あの時の場所じゃないか。」

僕は右腕を抱えながら家に戻った。

次の日にこの事がちょっとした事件になるとも知らずに。

4話 新たな出会いと何かの破片。（後書き）

約1週間ぶりのご無沙汰です。

みさお&あやのの登場で、次の話は事件の予感。

あの時の場所とは何か？そしてレイが触るなと叫んだ訳は次回もお楽しみに

5話 広がる亀裂と謎の写真

僕は腕の痛みと、あの日の夢のせいで目が覚めた。

「はあはあ、久しぶりに見たなあ夢。」

机の所に置いてある、腕時計、黒でシンプルなんだが、ベルトの所に大きな傷がある。

「そうか、もう10年なんだ。」

寝汗を流すために、シャワー室に向かう、いやでも、目に入ってしまった、この背中……

準備を整えた、僕は、家を出た。

<みさお視点>

昨日は気になってんねれなかったZ E、なぜか昨日のあいっんことが気になってしまう。

「あやの、柊。おはよー」

「みさちゃんおはよう、ちゃんと持ってきたわよ。」

「流石あやのだ。」

「おはよー、どうしたの?」

「ちょっとね昨日こういうことがあって。」

あやのが柵に昨日のことを話している。

「ふーん、その子って、つかさの所に転校してきた子だね。」

「じゃあ、朝、クラスによって行こうか、昨日のお礼も言いたいし。それでいいわよねみさちゃん？」

「そうだな、じゃ行こうか。」

私はそいつの生徒手帳を見ていた、そして中に挟まれてるあれを見つけた。

<レイ視点>

早めに教室に付いた僕は、机の中を探していた、生徒手帳をなくしたのだ、まあ生徒手帳には特別必要はないけど、あれはどうしても無くしたくないんだ。

「おやよう、高杉君、ちょっといい？」

かがみさんが机の前まで来ていた。

「おはようございます、別にいいですよ。」

僕は廊下まで一緒に行った、そしたら昨日の二人がいた。

「おはようございます、そして昨日はありがとうございます。」

「おはよー昨日は助かったZ E」

「こっちのロングヘアーの子が峰岸あやの、こっちのショートカットが日下部みさおよ、両方とも中学からの同級生。」

「そうなんだ、高杉零ですよろしく。」

「こちらこそよろしく、それで昨日私たちを助けてくれたときにこれを落としたみたいだったから、届けに来たの。」

あやのさんが僕の生徒手帳を持っていた。

「あっありがとう、探してたんだ。」

「なあーレイ。この生徒手帳に挟まってた写真ってお前か？それにしては古かったし。」

みさおさんの言葉を聞いた時、僕の中で何かが欠けた。

「生徒手帳を持ってきてくれたことはうれしいけど、勝手に中身を見ないでほしいな。」

僕は生徒手帳を奪い取ると、3人に背を向けた。

<かがみ&みさお&あやの視点>

私たちは去っていく高杉君を強く止めることができなかった。

「あっちょっと高杉君、みさお、なんで人の勝手に見るの?」

「そうよ、みさちゃん、あなたが悪いわ。」

「だってしょうがなかったんだってヴァ気になったんだもん。」

「で何の写真だったの？」

「確か、普通のレイの写真だと思うけど、髪の色が全く違ってた。それに茶髪の女の子と一緒にだったんだけど、誰かに似てるんだってヴァ。」

「こらーその3人、もうすぐ授業はじまるで」

「あつ黒井先生おはようございます、さっき高杉君教室から出て行きましたよ。」

「あいつは何しとるんや、全くアレと変わらんー。」

「ヴァ、黒井先生にそのこそっくりなんだってヴァ。」

「何の話や？詳しいことは休み時間聞くから、今は教室戻り。」

「分かりました、それじゃ失礼します。」

黒井先生にそっくりな女の子と、レイ君によく似た男の子の写真、私たちには全く分からなかった。

5話 広がる亀裂と謎の写真（後書き）

大変お待たせしました、次からは一気に話を加速させる予定です。
さて、写真の真実は？期待してください。

6話 明かされる真実と、黒井先生の涙

<こなた視点>

今日、到着たときには、レイ君はいたけど、先生が来るときには、レイ君は居なくなっていた。

そのまま時間が進み、休み時間にかがみんと日下部さん、峰岸さんが来た。

「こなた、レイ君は戻ってきた？」

「うっん、戻ってきてないよ。」

「どうしたんだろう、朝のことが原因で、居なくなったのかな？」

「あやのー、やっぱり私のせいかな？」

日下部さんがすごい落ち込んでる。

こんな日下部さんは初めてだ。

「荷物もないから、家に帰ったのかも。」

「黒井先生に後で話聞きに行こうかな。何か知ってるみたいだし。」

「そうだね、あとで皆で聞きに行こう。」

うなづく5人、そして時間は放課後になった。

「黒井先生失礼します。あのー朝の件で聞きたいんですけど。」

「おう、まっとなで、職員室やなんやから、会議室行こうか。」

私たち6人と黒井先生は会議室に向かった。

「そんじゃー、聞きたいことは、高杉の件やろ。」

うなづく6人、そして峰岸さんが話し始めた。

「昨日みさちゃんが、車にひかれそうになった時に、高杉さんに助けてもらったんです。その後に何か高杉さん苦しそうにして、そのまま去って行って。」

「その後に生徒手帳落としていて、その中にあった写真のことをみさちゃんが朝に聞いたら、急に態度変わって。」

「そういうこっちゃか。日下部、あんたが見た写真って、どんな写真やった？」

「確か、普通の写真だったけど、髪の色が違って、隣に茶髪の女の子が居た写真で、何か古い写真だったんだぜ」

「この写真やないか？」

黒井先生が一枚の写真を取り出した。これを見た日下部さんが叫んだ。

「先生、これだってヴァ。なんで先生が持ってるの？」

「簡単なこつちゃ、この写真の女の子は高校の時のうちや。」

「『『『『『えー』』』』』』」

ビックリした6人は全員が大声をあげた。

「まあ、普通は驚くわな、そしてその横の男性は高杉とはちゃう、あいつの兄貴の高杉尚人や、まあその当時うちらは付き合ってたんや。」

「で、なんでレイ君がその写真を持ってるんですか？」

「10年前、尚人は高杉が事故にあいそうのを助けたんや、その時に高杉は背中に大きな怪我をした、輸血が必要なくらいの。」

「やけど、高杉の血液型は、まれに見るボンベイタイプやったんや。そして高杉の身内で唯一ボンベイタイプやったんが兄の尚人や。」

淡々と話す黒井先生、その話に私たちは黙って聞いていた。

「うちももちろん、病院に駆けつけてたんや、そして尚人から、ある事実をきいたんや。」

『黒井、お前には話していなかったけど、俺は、心臓に病気を持っている、あと半年の命だっていうのは知っている、だけどレイには未来がある、あいつには俺の分まで生きて欲しいんだ。俺は今からあいつに輸血をする、おそらく死ぬことになるだろう、でも、忘れないでほしい、俺はレイの中で生きている、お前と出会えて嬉しかった、おれの夢はもう叶うことはない、教師になるって言う夢だけ

ど、黒井お前と一緒に教師やりたかったよ。』

「そういつて尚人は、手紙とはめてた腕時計をうちに預けたんや。」

『レイが目を覚ましたら、これをあいつに渡してやってくれ。』

「そういつて、尚人は手術室に入ったんや、あいつの命と引き換えに、高杉は生き残った・・・」

黒井先生の目に涙が浮かんでる、他のみんなも泣きべそになってる。

「あいつが事故にあった日、そして、尚人が死んだ日、それが10年前の今日なんや。」

「じゃあ、もしかしてレイ君は今。」

「おそらく、墓参りしてるかもな、行くかみんな？」

私たちはうなづいた。そして黒井先生と一緒に向かった。

6話 明かされる真実と、黒井先生の涙（後書き）

二日続けての投稿です、写真の謎と黒井先生の過去が判明して、いよいよ次の話でレイのもとに向かいます。

黒井先生の淡い恋話込みになった今回どうだったのでしょうか？皆様感想待っています。

次回予告（仮）

「もう君は一人じゃないから」

「兄貴、俺兄、貴の分まで笑えてるかな？」

次回をお楽しみに。

7話 溶ける心

僕は学校を無断で出て、あの場所に行った。

10年前に尚にいが眠った場所、そして親と一緒に眠ってる場所に。

「尚にい、今日で10年なんだね、尚にいのおかげで、僕は今生きてるけど、もう辛いよ・・・」

花と一緒に買ったものを握りしめて僕はお墓に呟いた。

「尚にい、僕もそっちにもう行ってもいいかな？」

僕は買った、カッターナイフの刃を出して、自分の手首にあてようとした。

<こなた視点>

レイ君の家のお墓にみんなに向かって私達はレイ君を見つけた。

「はあはあ、やっと見つけたよ。」

「何だろう凄い、暗いね、レイ君。」

「ひいらぎー、あいつの手に持ってるの。」

「レイ君自殺するつもりよ止めないと。」

<レイ視点>

手首に当てたカッターを引こうとした瞬間、横のほうから人の走ってくる気配がした。

「みんな・・・何しに来たのさ。」

「レイ君自殺なんてダメだよ。」

「死んだって、お兄さん喜ばないよ。」

「何が分かるんだよ!!」

「確かに私たち分らないよ、でもお兄さんはレイ君がそんなことする為に代わりになったんじゃないんだよ。」

「高杉、尚人はな、自分が長く生きられないの知っていて、自分の命をあんたに預けたんや、あんたが死んだら、尚人は本当に死んでしまっくんや、あんたが生きてる事で、尚人もあんたの中で生き続けるんや。」

「先生・・・」

「うちには、あんたの気持ちがよく分かる。親がいなくなっであんたは一人や、うちも尚人が死んだときに、運命を恨んだわ、でもな、尚人はあんたの中に生きてる、そしてあんたには、こんなに心配してくれてるやつらがいるやないか、もうあんたは一人じゃないやで。」

「先生、俺は、尚にいの分まで笑えますか？」

「こいつらとうちがおつたら大丈夫や、うちのスキやった尚人の弟や保証したる。」

「レイ君歸ろう、みんな仲間だよ。」

「ありがとう、みんな。」

僕は、お墓に花を添えると、空を見上げた。

「尚にい、オヤジたち、僕、頑張るよ。ずっと見守って行ってね。」

7話 溶ける心（後書き）

お久しぶりです、少し重くなりましたが、レイはみんなの元に戻ってきました。

次回はどんな話になるのか・・・楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6043j/>

らき すた ZERO

2010年10月10日22時05分発行